

2022年11月27日(日) / 説教者: 神谷武宏

説教: 「傷ついた葦を折ることなく」(イザヤ書42:1~9)

今週からアドベント(待降節)にはいる。私たちは2022年のクリスマスを中心に待ちわび、喜び迎える者でありたい。

イザヤ書42章は「僕の歌」とも称される。この時代はユダ王国が戦いで敗れ、多くの民が強制連行されて異国の地バビロンにおいて差別的・抑圧的な生活を強いられていた。もうすでに50年が経過し、故郷に帰りたいという思い、希望は消えかかり、心は折れそうな状況にあったが、ここにキリスト到来の預言が語られて行く。

心折れそうな、光が消えそうな状況にあって、苦難な時代を希望の光に、希望の歌に変えて行く。「傷ついた葦を折ることなく / 暗くなってゆく灯心を消すことなく・・・暗くなることも、傷つき果てることもない」(42:3-4)と。この苦難な時代にその状況を歌に変えて励まし合うことは時にある。私たちの沖縄もまた、苦しみを歌に変え、慰めを覚え、励まし歌い、時代を語り継ぐ、歌い継ぐものがある。

沖縄戦の終結の頃に作られた沖縄民謡「屋嘉節」がある。金武の屋嘉に捕虜収容所があり、その収容所の中で「屋嘉節」は作られ歌われた。この「屋嘉節」にはいくつかの歌詞があるが一つ紹介する。

沖縄民謡「屋嘉節」

一、 なちかしや沖縄 戦場になやい / 世間御万人ぬ袖ゆ濡らち

<悲しい(の)は沖縄 戦場になり 世間御万人の袖を(涙で)濡らし>

二、 涙飲でい我んや恩納山登てい / 御万人とう共に戦凌じ

<涙(を)飲んで 私は恩納山(に)登り 多くの人と共に戦(を)凌ぎ>

三、 あわり屋嘉村の闇の夜の鴉 / 親うらん我身ぬ 泣かんうちゆみ

<哀れ屋嘉村の闇の夜のカラスよ 親がいない私が 泣かないでいられるか>

四、 心勇みゆる四本入り煙草 / さみしさを月に流ちいちゆさ

<心励ますことができるのは 四本入り煙草 淋しさは月に流して行くよ>

四本入りの煙草とは、収容所の中で配給された物かと思うが、静かに煙草をふかすこの時は、平和を感じる時でもあったであろう。同時に淋しさ、不安もよぎる時であったかと思う。この他にも戦争の悲しみ、辛さを歌った民謡はいくつもあるが、沖縄の人々はそのようにして自らの涙をぬぐい、立ち上がろうとしたのである。

主なる神は、「傷ついた葦を折ることなく / 暗くなってゆく灯心を消すことなく・・・暗くなることも、傷つき果てることもない / ... 捕らわれ人をその枷から / 闇に住む人をその牢獄から救い出す」と希望の歌を教えてください。今にも折れそうなあなたの心を、主はご存じであり、その心を折らせない。クリスマスの恵みはそこにこそある。2022年のクリスマスをご一緒に迎えたい。(神谷)